

「ヨハネによる福音書」を読む 第2回 ヨハネ福音書 第3～4章

2009年3月8日（東京 新宿）

奥田 昌道

3章と4章は対照的 ニコデモとの対話 「第四の書 神との対話」 「第一章 神の現臨」 （第四の書） 「第二章 祈り」 （第四の書） 青銅の蛇 「第一章 神との交わり」 （第五の書） 「第五章 キリスト教」 （第七の書） サマリヤの女との会話 役人の息子をいやす 「復活の奥義」 （第五章 キリスト教） 祈り

●3章と4章は対照的

皆さま、よくおいでくださいました。今日は時間が限られているということですので、限られた時間の中に本来に濃厚な内容で、皆さんは輝いてお帰りいただけるのではないかと思います。ご自分のほうで何も緊張することはないんです。イエスという方は——黙示録に出ています——

「あなたの胸の扉を叩いているよ、心を開けば入っていくよ」

と。これは素晴らしいんですよ、イエスさまという方はずうつと上から降^{くだ}ってきてくださるお方ですよ。高い所に鎮座しまして、「我を仰げ」と言っておられるのではなくて、降ってきて、

「いつもあなたと一緒にいたいよ」

と言ってくださいなんです。では、どうしたらいいのか。

「心の扉を開きなさい」

と言う。心の扉さえ開けば、スツと入ってきてくださる。ちょうど、朝、窓をあけ開くと朝日の光がスツと入ってきますね。それと同じなんですよ。向こうから我々を抱きたくて抱きたくてしょうがないという、そういう愛のお方ですから。これだけはもういつも覚えていてください。

「いつまでも、あなた方と一緒にいる。世の終わりまで、地の果てまで、あなた方

と一緒にいる。あなた方と一つになって、神の業を一緒にやっ^{しよ}てい^べこう」

と、そう言ってください。我々はイエスさまの同志なんです。僕^{しもべ}ではありますけれども、同志、仲間、一緒に仲間ですから、そこを誤解なさらないで、リラックスして聞いていただけたらと思います。

今日は、中味はヨハネ伝の3章と4章に限定します。それだけでもなかなか豊かなところ



ろなので、どこまでやれるかわかりませんが、精いっぱいやってみます。

3章のところは「ニコデモとの対話」というところです。3章と4章は非常に対照的なところ。3章は天の次元が深く示される。

「人、新たに生まれずば……」

「新しく生まれるとはどういうことですか？」

「天の次元と地の次元は全く違うよ」

と。肉なるニコデモはいくら偉い学者であってもわからなかったんですよ。

「人は水と霊によって生まれなければ、上から生まれなければ、どうにもならん」

ということをやって、その天の次元を非常に深く語っているのが3章です。

4章へいきますと今度は、あの「サマリアの女」との対話で、楽しいところですよ。非常に楽しいドラマチックなところです。だから、3章と4章は非常にいいコントラストをなしているなと思って、昨日は準備をしておりました。前回は、1章と2章を中心しながら、だいたい、プロローグ「序幕、序言」ということでヨハネ福音書の全体的なことをお話ししました。今日は3章からということにいたします。

皆さまも十分に何度も読んでください。一、二度では足りない。何度も何度も読んで、その中に分け入って、語っていらつしやるイエスさまと、本当に一つになるような気持ちで読んでいただきたい。そうしたらまた、新しいものが見えてくる。まあ、そんなこともお話ししたいと思います。

それから前回、サンダー・シングの本『聖なる導き インド永遠の書』1996年6月徳間書店刊]をご紹介しました。これは今はなかなか入手できないかもしれませんが。だから、今日もその本の中から非常に参考になる所を皆さんにお話したいと思っています。サンダー・シングという人は——小池先生は1904年生まれでしょ——1904年に15歳で彼は回心した。その時に彼は本当に行き詰まって、

「もう死にます。あなたが答えてくださらなければ、私は鉄道自殺いたします」

と祈りこんだ。その明け方、午前五時直前にキリストが現れてくださった。それで本当に見事に大転換をした。ご紹介する内容もだいたい1922年から1926年の、歳からいえば30歳台の後半くらいです。チベットで40歳くらいで殉教したのではないかということです。だから、素晴らしい人は早く召されていきますね、やるだけのことをやって。地上に残っているのはカスばかりとは申しませんが（笑）、未完成の作品です。しかし、未完成な人間を通してまた神さまは働きをなさる。あまり完成された人ばかりだったら、この世の人はついてきてくれない。だから、未完成またよし、完成もまたよし、すべてよしという、そういうふうにおおらかに受けとってください。



●ニコデモとの対話

それではヨハネの福音書の第3章です。新共同訳で読んでいきます。

「さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であつた。²ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行ふことはできないからです。」

一応、敬意を表しているんですが、ただ、ニコデモは夜にやつて来た。昼、公然と来ない。それがパリサイ人というかな、尊敬して「すごい、すごい」と思いながらも、夜こっそりとしかやつて来ないという、まあそのへんに問題があるのではないかと思います。イエスは、そんなことは一向に問題になさっていない。

「先生、すごいですね。神さまが一緒でないとそんなことはできっこありません」と、さんざん持ち上げているのに、イエスはそんなことはおかまいなしに、

³イエスは答えて言われた。「はつきり言っておく。この「はつきり言っておく」という言葉は何回か出てきます。

人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」⁴ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができますでしょう。もう一度母親の胎内に入つて生まれることができるでしょうか。」

もうここでトンチンカンな問答が始まっています。

⁵イエスはお答えになった。「はつきり言っておく。だれでも水と霊とによつて生まれなければ、神の国に入ることはできない。⁶肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。⁷『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。⁸風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」「するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。¹⁰イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことがわからないのか。¹¹はつきり言っておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。¹²わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。¹³天から降つて来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもない。¹⁴そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。¹⁵それは、信じる者が皆人の子によつて永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3・1～15）



という。

「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」
あるいは、

「だれでも水と霊によつて生まれなければ、神の国に入ることはできない。
肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。『あなたが
たは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならな
い。」

と。肉の誕生は、我々は全部経験したわけです。ここにいらつしやる皆さんはみんな肉の
誕生を経験した。しかしながら、神さまのことに關しては、ニコデモは非常にイエスのな
さっている不思議な御業などに感動して、

「あなたはすごい方です。神さまがご一緒でないと、とてもそんなことはできるわ
けではありません。ぜひ、その秘訣を教えてください」

という気持ちできつと来たんでしょね。ところが、そんな問題ではないんだと。人は新
たに生まれなければ。神さまが新しい誕生をくださるんだよ。人間の側から努力して、
つかみ取るものではない。神さまがくださるんだ、新しい誕生をと。

「そんなことを言われたつて、水と霊によつて生まれるとか、上から神さまから
生まれるとか言われたつて、お手上げではないでしょうか？」

「そうだよ、お手上げだよ」

と。そして、十字架のことが出てくるんですね、ここに。

「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それ
は、信じる者が皆、人の子によつて永遠の命を得るためである。」

と。どうやら、「新たに生まれる」ということと、「永遠の命をいただく」ということがイコ
ールなんです、ここでは。そのことにお気づきになりましたか。「新たに生まれる」とは
どういうことなんだろう。ウワーツと聖霊のバプテスマを受けて、ドーンと引っくり返つて、
何かするんだろうかと。そんなことは一言も書いてない。

「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それ
は、信じる者が皆、人の子によつて永遠の命を得るためである。」

と。次の3章16節へつながっています。ということは、「新たに生まれる」ということは神
さまの御業である。神さまだけができること。具体的にはイエスさまだけが、その「新た
に生まれる」ことを私たちにくださる。イエスさまの生命をいただくことが、「新たに生ま
れる」ことなんです。そういうことがここで暗示されていると思う。

●「第四の書神との対話」

それで、さきほど申しましたサンダー・シングのところから少しご紹介したいと思います。



サンダー・シングが1922年6月30日という日付で序文を書いている「第四の書神との対話」というのがある。これは読んで本当に感動的でした。サンダー・シングは、さつき申しましたように、1904年に回心を経験して、それから15年くらいのちの話です、この書物を書いていますのは。そのときに彼は岩の上に座禅を組むような姿で座って、そしてよくお祈りをする。ところが、その時に彼の所にサタンがやって来た。ちょうどイエスさまが荒野の試みに遭われたように、サタンがやって来た。そして、

「ヒンドゥー教の教師になれ。そうしたら物凄い弟子たちをあなたに差し上げるから。イエス・キリストなんて下らない神さまにうつつをぬかさないので、こつちへ来たらどうですか」

と、非常な誘惑をしてきた。もちろん、彼はそれを断乎退ける、「サタンよ、退け！」と。そんなことで彼は泣きながら祈った。それがここに出てきますので、それをご紹介します。「サタンよ、退け」とやったものですから、これは人の姿をしてやって来ている。

《相手はこの言葉をきくと激しく怒り、何かを咬^{つば}きながら立ち去った。そして、わたしは泣きながら、祈りの中で神にわが魂を注ぎ出した。

次が祈りの言葉です。

「わたしのすべてのすべて、命の命、霊の霊であられる主なる神様、わたしの心があなた以外の何ものも愛することのないよう、どうか慈悲の中でわたしをみつめ、聖霊によってわたしを満たしてください。わたしは、生命の与え主、その祝福のすべてであられるあなた以外、何ものも求めません。わたしは世俗も富も求めず、天国も求めはしません。

「天国さえも要りません、あなただけです」という切なる祈りです。

ただ、あなただけを、あなただけを切に求めます。あなたがおられるところに天があるからです。わたしの心の飢えと渇きとは、それをお造りになったあなたによってしか満たされません。ああ、わが造り主よ！ あなたは、あなたのためだけにわたしの心をお造りになり、それ以外のもののためにはお造りになりませんでした。

人の心というのは——サンダー・シングはよく書いている——神さまがお住まいになるその場所なんだと。その神さまの宮である心を他のものに明け渡して、他のものが独占していたら、神さまは入る場所がなくなってしまう。それでは祝福は望めません。心というものを神さま以外のもので満たさないように。心は神さまのお座りになる場所、お宿りになる場所。だから、それをいつも神さまのために開けておく。私はさつき「心の扉を開きましょう」と言いました。そうしたら、イエスはそこに入って、「一緒に御馳走を食べようよ」と言ってくださったでしょ。そういうふうには、「わが心」というのは非常に凄いです。いっつか、小池先生から榮西禅師の「偉大なるかな心」というお話を聞いたことがあります。

あなたは、あなたのためだけにわたしの心をお造りになり、それ以外のもののために



はお造りになりませんでした。だから、わたしの心はあなたの中でしか安らぎをみることはないのです。わたしの心をお造りになり、安らぎを求める気持ちをお造りになったあなたの中でしか。ですから、あなたに反するものをすべてわたしの心から除き去ってください。そして、わたしの心にお入りになり、お住みになり、永遠に支配してくださいますように。アーメン」

こういうお祈りをした。

祈り終わって立ったときに、わたしは光と美に包まれた神々しい存在が前に立つのを見た。その人は一言も語らず、わたしも涙に目が霞んで相手がはつきりとは見えなかったが、その人からは生命を与える愛の稲妻にも似た光線が放たれ、その力はわたしの魂を貫き、溢れるほどに強いものであった。

わたしはすぐに、愛する主が目前に立たれていることを知った。そして、それまで座っていた岩を離れ、主の御足下に倒れ込んだ。主はわたしの心の鍵を手にしておられた。その愛の鍵でわたしの心の奥まった部屋を開けるや、主はその尊き現存

この「現存」は「プレゼンス (presence)」という言葉だと思う。主の「臨在」だとか、それを「現存」というふうに翻訳している。

主はその尊き現存でこれを満たされた。そして、わたしは内も外も、自分のみるところにおいても主のお姿しか見えなくなった。

このときに、わたしは人間の心が神の御座、^{とりで}若そのものであり、神がそこにいられてお住まいになるときに、天国が始まることを知ったのである。この束の間に、主はわたしの心を深く満たされ、わたしが何冊本を書こうと到底伝えることができないほどの驚くべき言葉をお話しになった。このような天のことは天の言語でしか説明できない。地上の言葉はまったく不十分だからである。

とはいえ、主が異象という手段でわたしにお示しになった天の事柄の幾つかを書き下してみようと思う。わたしが座っていた岩は今や主の座所となり、わたしは主の御足下にひれ伏していた。そして、以下に続く対話が主と弟子との間に交わされ始めた。》

（第四の書 神との対話 「第二の異象」）

こういうふう書いてある。

●「第一章神の現臨」（第四の書）

この「第一章神の現臨」の「第一節 霊眼^{みたま}聞かれるとき、聖霊である神をみる」というところ。霊の眼が開かれるときに聖霊でありたもう神さまを見る。逆にいうと、霊の眼が開かれなければ——ニコデモさんは開かれてなかった——霊の眼が開かれないと、いくら神の国のことを論じて、神の業を論じて、それは議論であっても事実ではない、実体ではないんです。だから、イエスはそれをわかっておられるから、「人新たに生まれなければ、



水と霊によって生まれなければ」と仰った。サンダー・シングは、「霊の眼が開かれるときに聖霊である神をみる」という。このところは前回もご紹介したと思うんですが。

《弟子》— ああ、生命の泉であられます主よ、あなたを敬う者たちから、なにゆえお隠れになりますか。なにゆえに、あなたを仰ぎ見る者たちの目を歛^{あは}せ給いませんか。

「みんな見たいんです、あなたを見たいんですよ」と、サンダー・シングが訴えている。主は答えられて、

主——一、わが真実の子よ、真の幸福は視覚に頼るのではなく、霊の目を通して生まれ、胸に頼るのである。パレスチナでは、何千人もの人々がわたしをみたが、そのすべてが真の幸福を得たわけではない。滅ぶべき目がみるものは滅ぶべきもののみである。

肉眼は滅ぶべきものであり、肉眼が見るのはやはり滅ぶべきもののしか肉眼は見えない。永遠なるものを見るのは霊の眼である。霊の眼が開かれなければ見えない。「人新たに生まれずば」というのはそのことなんです。

肉の目は不滅の神と霊的存在とをみることができないからである。例えば、あなた自身、自分の霊をみることができないのに、どうしてその造り手をみることができよう。だが、霊の目が開かれるときに、あなたは確かに聖霊である神をみることができる。そして、あなたが今わたしをみているのも、肉の目によってではなく、霊の目によってみているのである。

イエスが目の前にお立ちになった、それを見た。それはサンダー・シングの霊眼が開かれた。だから、見たんです。もし、他の人がそばに居合わせても、決して見えてないんでしょうね。そういうことなんです。

パレスチナで何千人という人々がわたしをみたときに、彼ら全員の霊眼が開かれたのであろうか。それとも、わたし自身が滅ぶべきものとなったのであろうか。そのいずれでもない。わたしが滅ぶべき体「肉体」をとったのは、その体においてこの世の罪の代償「罪の贖い」を与えるためであった。そして、罪人^{つみびと}たちの救済の仕事が完了したときに、不滅のものが、滅ぶべきものを栄光へと変えたのである。そのようにして、復活のあとでは、霊眼を受けた者だけがわたしをみることができたのである。

復活されたイエスさまを見た人たちは、たくさんの人に現れてくださったけれども、肉の眼で見えないんですね。霊の眼で見えていた。どうもそのようですね。

二、世にはわたしについて知ってはいても、わたし自身を知らぬ者が大勢いる。キリストについて論ずる者はたくさんいる。キリストの物語を語れる人間はたくさんいるけれども、キリストご自身を知らないで語っている。そういうことです。よく小池先生が仰ったですね。「私は、については語らない。の中から語る」、そう仰ったですよ。

それは、彼らがわたしと個人的つながりをもたないからである。



どこまでも個人的つながりなんです、救いというのは。

このため、彼らはわたしを真に理解することも信じることもなく、自分の救い主、主としてわたしを受け入れることもしない。……

人は、いかに学識があろうとも、霊眼が開かれるまではわたしを知ることができない。わたしの栄光をみることも、わたしが神の受肉であることも理解できないのである。」

……

四、真まことの平和は、真の信者の胸の中にわたしが臨むことから生まれる。

彼は度々この「真の平和」と言う。それは神さまが宿ってくださる、キリストが宿ってくださるあの平和、歓びは誰も奪うことができない。これがもう最高だということを言う。あまり奇蹟の業のことは言いません、サンダー・シングは。

彼らはそれを見ることができなくとも、その力は感じとりそこに幸せを感じる。そのような心の幸せを見ることができなくとも、それを通してわが存在の平和を歓ぶことができる。それは、舌と砂糖の関係にも似ている。舌にある味覚とそれが感じとる甘さは、いずれもみることができない。そのように、わたしはまた『隠されたマナ』によって、子供たちに生命と歓びを与えるが、世はどのような知恵をもつても、それを知ることができないのである。》

そういうことを言っております。それから次に

《第二節 信じる者たちに、わたしは永遠の生命いのちを与える

さつきありましたね、「人の子も上げられなければならない。それは信じる者がみな人の子によって永遠の生命を得るためである」と。これをそのまま表題にした箇所です。

弟子——主よ、あなたが世界に特別に御出現くだされば、神とあなた様の神性を疑

う者はいなくなり、すべての者が信じ、義の道に入ることでしょう。

それなのに、なぜ、現れてくださらないのですか、というわけです。

主——一、子よ、わたしは万民の心の状態をよく心得ているし、必要に応じて一人の胸に自らを知らしめている。人を義の道に引き入れるには、わたし自身を現す以上によい手段はない。わたしは、人のために人となった。彼らが神を知るようになるためである。恐ろしい異質な者としてではなく、愛に満ちた、人に似たものとして世に現れた。人は神に似て、神の姿に象かたじられたからである。

人はまた、自分の信じている神、自分を愛してくださっている神に会いたいという、自然な願いをもっている。だが、父を見ることはできない。父のご性質は人の理解を超えているからであり、父を理解するには父と同じ性質をもたねばならないからである。

そうですね、神さまと全く同じ性質に我々がなってしまえば、神さまのことはみなわかるんでしょうが、そうはいかないというわけです。



一方、人は理解できる被造物であり、人間のことならわかります。人間のことはわかるけれども、神さまのことはわからない。神を見ることはできない。

それがため神をみることはできない。だが、神は愛であり、その同じ愛の力を人にお与えになっているため、愛の渴きを満たすために、神は人に理解できる存在の形「人間の姿」をとられたのである。こつして、神は人となった。それは、子供たちがあらゆる聖なる御使いとともに彼を見、歎くためである。わたしをみた者は父をみたのである、とわたしが言ったのはそのためである。わたしは、人の形をとっている間は、子と呼ばれるが、永遠の父である。

不思議なことが書かれている。人の形をとっているときは「子」と呼ばれているけれども、本質は「永遠の父」である。だから、「父・御子・聖霊」は三位一体というのは、そういうことなんです。それが次に出てくる。

二、わたしと父と聖霊は一つである。太陽には光と熱とがあるが、光は熱ではなく、熱は光ではなく、別々の形をとって現れている。それでもこの二つが一つであるように、父からくるわたしも聖霊も、世に光と熱を与えている。洗礼の火である聖霊は、信じる者の胸の中であらゆる罪と汚れを焼き尽くして灰とし、彼らを清く聖なる者に変える。

聖霊が我々の罪を全部潔めてくださると、サンダー・シングは言います。もちろん、根底に十字架があるわけですが、それをベースにして来てくださる聖霊が私たちの内なるものを全部焼き尽くして、常に聖なるものとして保ってください。

真の光であるわたしは、あらゆる闇と邪悪なる思いをかき消し、人々を義の道に引き入れ、ついには永遠の家に招き入れる。だが、太陽がただ一つであるように、われわれもまた三人ではなく一つである。

「父・御子・聖霊」は一つである。「ああ、なるほど、なるほど」と楽しくなってきましたでしょ。太陽があつて、その光がくる、熱がくる。それで我々は変化を起こすわけです。でも一つであると。父なる神さま、子なるイエスさま、そして聖霊のお働き、全部一つのものから流れてくる。人である間は「子」と呼ばれている。でも、本質は「永遠の父」なのである。一つなんだと。はい、いやあ、なんか嬉しくなってきましたね。皆さん、そうではありませんか。次にこんなことも書いてある。

五、また、わたしは、真摯な心でわたしを探し求める者たちに、わが言葉（聖書）をもって自らを現わしめている。

ここに霊なる神さまと御言、聖書との関係が書かれている。

わたしが人を救うために人の姿をとったように、霊であり命であるわが言葉もまた、人の言葉で書かれている。



霊であり生命であるその言葉は、人間の言葉を使つて表現されているというわけです。つまり、霊感的要素と人間的要素がそこで一つにされている。

だが、人はわたしを理解しないのと同じく、わたしの言葉を理解していない。ヘブライ語とギリシャ語の知識でそれを理解することが必要なのではない。必要なのは、預言者と使徒たちにそれを書かした^{みたま}聖霊との交わりである。

聖書の言葉を書かしている奥なる霊、聖霊の働きがある。その聖霊なるお方との交わりができれば、霊眼が開かれて、その聖霊なるお方に宿っていただければ、その聖霊から発している御言は、どんな人間的な不完全性があるうと、それを突き破つて本質につかまれてしまう。あるいは、本質をつかむことができる。そういうことを言っている。

聖書の言葉は、疑いもなく霊的であり、世の批判に通じている者であつただの子供であれ、聖霊によつて生まれた者のみが、よくそれを感得しうるのである。

楽しいでしょ。学者とかこの世の知識の問題ではない。子供でもわかるという。聖霊によつて生まれた者たちには——赤ちゃんはお母さんの言葉、思いがわかります——そのように、聖霊によつて生まれた者には直ちにわかるんだと、神の言葉というものは。

霊的言語は人の母国語でもあるため容易に理解できるはずなのだ。

我々は霊的存在者、その霊が眠っている。それが一皮むけて、霊の眼が開かれる。聖霊さまが来てくださる。そうすると、霊の言葉である神さまの言葉は、直ちに我々は理解できる。そういうふう言ってくれています。

だが、この世の知恵しかもたないものは、聖霊を受けていないため、それを理解することはできない。》

●「第三章 祈り」(第四の書)

それで次に、祈りのことも書いてくれていますので、そこを先にご紹介して、それからまたヨハネ伝の3章に戻りたいと思います。

《第三章 祈り 第一節 祈りとは、聖霊を呼吸することに等しい》

という書き出しの第一節です。祈りとは聖霊を呼吸することだと言う。

二、祈りとは、いわば聖霊を呼吸することに等しく、神は人々が「生ける霊」となるよう、祈りに満ちた生活の中に聖霊を注がれる。彼らは決して死ぬことがない。彼らの祈りによつて、神が聖霊を彼らの霊的肺に注ぎ込み、健康と活力、永生で彼らの靈魂を満たしてくださるからだ。

愛なる神は、すべての者に霊的生活と世俗生活の両方に必要なものを無償でお与えになつている。

これが大事なんです。「霊的生活だけ」という人はだめなんです。霊的生活と同時に世俗的生活です。我々は俗人でしょ、世俗にまみれている人間です。その世俗にまみれている人



間に霊的な力、知恵、全てを与えてくださる。両方が必要だとサンダー・シングは言う。救いと聖霊は万人に無償で与えられていることから軽視されているが、祈りはそれがどれほど尊いものであるかを教えてくれる。

神さまから物凄いいろんなものが来ているのに、それを無償で、^{ただ}只で与えられるから、人間は全然感謝しないと、嘆いておられる。

それは空気や水、熱、光と同じほど必要であり、それなくして生命は存在しえないのである。

「救いと聖霊」ということ。救いというのは、十字架で我々が罪から解放されているという、新たに生まれるきっかけになる土台ですね。そこに聖霊という生命が注がれてくる。この二つは万人に無償で与えられている。あたかも空気と水、熱、光、みんな無償ではないか。その尊さを知らせてくれるのが祈りであると。では、祈りとは何か。お願いごとではない。神さまと交わること。神・キリストと霊の交わりをすること、これが祈りだ。おねだりではないということ、散々、彼は言うんですよ。「天国も要りません。ただあなただけです。私の心があなたによって満たされることだけを願います」と言いました。それなんです。人間の霊的生活に必要なものは、神が無償でお与えになってくれたものなのに、人はそれを軽くみるあまり、創造主に感謝を捧げることさえしない。その一方で、金、銀、宝石など、稀少で得るのが極めて難しい物質的宝を重くみるが、このようなものでは体の飢えも渴きも、心の渴きも満たすことができない。この世の者は、かくのごとき愚かさをもって霊的事柄に処するが、祈りの者には真の知恵と永遠の生命とが与えられる。

それから、こんなことも言ってます。船と水の関係ですね。

七、船は水に浮かんでいて当然だが、水が船に流れ込んでくれば、危険である。同じく、人間がこの世界におかれているのは自他ともに相応しいことである。彼は浮かんでいることによって他を助け、生命の安息所へ連れていくことができる。しかし、この世のことが心に流れ人つてくれば、死と破滅を意味する。

心は神さまのお住まいであるのに、その場所が世俗のものによって満たされてしまったら沈没するではないか、というわけです。

そのように、祈る人は神の宮となるべく造られた心を、神のためにとっておくのだ。こうして、この世においても来るべき世においても平和と安全の中に留まる。

八、人はみな、水がなければ生きてはいけないことを知っているが、水に沈めば窒息して死ななければならない。水を利用し飲む必要はあっても、水に落ちて沈んではならないのである。そこで、世俗生活を送るにも慎重さが必要である。まったく世俗生活での出来事に対処しないしていると、生きることが困難になるばかりか不可能になってしまう。



いいことを言っていますでしょ。世俗生活は絶対に大事だ。しかし、それには慎重に対処しないと、足をすくわれて死んでしまう。水の上に浮かんでいる船という——水というのは世俗生活——世俗生活に接してあわや沈むばかり。それが心の中に入りこんで占領してしまうと沈没する。そこに神さまの霊が宿ってくださいっていると、安全に港へたどり着くということなんです。非常に、サンダー・シングというのは比喻がうまい。非常に適切な比喻で天のことをわかるように言ってくださいます。「天のことはこの言語で説明しにくい」と言いました。だから、イエスさまも譬えをたくさん使われたのではないかと思う。「種蒔き」の譬話とか。もちろん、天のことをダイレクトに言くと、パリサイを批判し、敵のつけいる隙になるからということ、ボカされた面もあるでしょうけれども、本質的にはやはり天のことは地上の言葉では説明できないのではないかという感じがいたします。

人が世俗生活での出来事を霊的生活に生かすという目的のために、神は世界をお造りになったのだが、この世に吞まれてはならないのだ。そうならば、祈りの呼吸は停止し、

霊的に減じるより他ない。》

第二節のところへきますと、「第二節 この世とこの世のすべては「空の空」である」ということが書かれています。これはペンテコステの出来事を次のように書いています。

《一、われわれは、祈らなければ神が何物もくださらないから、われわれの必要とするものにお気づきにならないから祈るのではない。

我々の必要とするものに神さまがお気づきにならないから、祈るのではない。祈らなければ神さまはくれない。神さまは何も知らないから、無理やり祈って、神さまの眼を覚ませる、そんなのではないと言っています。

祈るという姿勢によって、霊魂は神が与えようとしている祝福ばかりか、祝福の与え主を受けとるにもつとも相応しいものとなるのだ。

祈るという姿勢によって神さまとの間の関係ができ上がるというんです。

主の御昇天の一日目ではなく、十日にわたる特別な準備のうちに、使徒たちに聖霊の恵みが溢れるばかりに降下したのもそのためであった。

天に昇っていかれる時、「祈って待っていないさい。そうしたら、必要なものが与えられる。力が与えられる」と言われた。十日間、心を一つにして祈っていた。そしたら、ペンテコステの時にあの聖霊が降ってきた。これはやはりそれだけの準備をしたから、降ってきた。準備もなしに、突然来たら、その有難さがわからない。そのことを言っている。

特別な用意もせずに祝福が与えられようものなら、人はその有難みを噛みしめることも、長く保ち続けることもできません。

サウルという王様がいた——サウルのあとがダビデです——サウルは聖霊をいただいて、しばらくはよかったけれども、途中で神さまはサウルから離れられる。なぜなんだろうか。

サウル王が聖霊の恵みと王権の両方を早々と失ってしまったのも、すすんで求めずし



て、それらのものを手にしたからであった。彼は聖霊を得るためではなく、迷いロバを捜すために家を出たからである。

ロバを捜しに行った途中で聖霊がくだった。だから、その有り難みがわからなかったんだと、ここに書かれている。これは心すべきことですね。我々はやはり、神さまが与えてくださるものはどんなに尊いものか。それは心の準備ができて、有り難みがわかるという状態を与えられて初めてその尊さがわかるんですね。

二、祈りに生きる人のみが、霊とまことの中で神を拝することができる。それ以外はおじぎ草に等しい。彼らは礼拝の間は聖霊の教えと現存に打たれて縮み上がり、頭を垂れて深刻になるが、教会から出てしまえば晴れ晴れとして前と同じ生活を続けるのである。

そういう教会のことを批判しています。

三、良い花と実とをつける木や灌木も、手入れせずにいれば退化し、野生化してしまふ。同じように、祈りと霊的生活を顧みず、わが内に生きることをやめた信者もまた、不注意によって恵みの座から落ち、罪深き生活に舞い戻り、失われるのである。……

九、母の与えてくれる母乳も、赤子が飲むとしなければ与えられるものではない。わたしが胸に抱き締める子供たちもまた、すすんで求めなければ、魂を救う霊的乳を得ることはできない。そして、子が教わらなくとも乳を飲む方法と場所とを本能的に心得ているように、聖霊によって生まれた者たちもまた、この世の哲学や知恵ではなく霊的本能によって、自分たちの霊的な母、永遠の生命という乳をわたしに祈り求める方法を心得ている。

十、わたしが人間の性質の中に飢えと渇きを注ぎ込んだのは人が愚かにも自分を神とみたりせず、自分の必要としているものは何かを毎日思い起こすため、自分を創造してくださったお方の生命と現存とに心を傾けるためであった。こうして自分に欠けているもの、必要なものに気づくとき彼がわたしの中に生き、わたしもまた彼の中に生き、わたしの中に幸せと喜びを永遠に見出すためである。》

私たちが常に渇きとか飢えとか、魂の何か不満足を感じる。それは、

「ああ、主イエス・キリスト、あのお方が私の心に住んでいてくださったときに、私がお方の中にいだかれているときに、あの頂いた平安、歓び、感謝、何とも言えないあの心の姿、あれがもう一度欲しい」

という、渇きを起こさせるために、神さまは時々ちよつと姿を消してみたり、いろんなことをして、私たちを刺激なさるんです。ですから、このようにして、霊の世界のことですから、それはやはり霊の導きによって、聖霊の導きによって導かれていくことが大事であつて、決して学問とかそういうものではないということが、このようにしてわかります。



●青銅の蛇

ヨハネ伝3章に戻ります。

「¹⁴そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。¹⁵それは、信じる者が皆、人の子によつて永遠の命を得るためである。」

ここところはちよつと旧約聖書のその箇所を⁶紹介しておきます。民数記21章4節から。これは40年の旅路の中での出来事ということになっている。「青銅の蛇」という見出しが付いています。

「⁴彼らはホル山を旅立ち、エドムの領土を迂回し、葦の海の道を通つて行つた。しかし、民は途中で耐えきれなくなつて、⁵神とモーセに逆らつて言つた。「なぜ、我々をエジプトから導き上つたのですか。荒れ野で死なせるためですか。パンも水もなく、こんな粗末な食物では、氣力もうせてしまいます。」⁶主は炎の蛇を民に向かつて送られた。蛇は民をかみ、イスラエルの民の中から多くの死者が出た。⁷民はモーセのもとに来て言つた。「わたしたちは主とあなたを非難して、罪を犯しました。主に祈つて、わたしたちから蛇を取り除いてください。」モーセは民のために主に祈つた。⁸主はモーセに言われた。「あなたは炎の蛇を造り、旗竿の先に掲げよ。蛇にかまれた者がそれを見上げれば、命を得る。」⁹モーセは青銅で一つの蛇を造り、旗竿の先に掲げた。蛇が人を含んでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た。」（民数記21・4～9）

こういう不思議なことが出ている。「炎の蛇」とか大変な異象、あるいは、神さまの霊的な御業です。イスラエルの人たちは本当に¹¹眩きつ放しですよ。せつかくあのエジプトの苦役から解放されて、カナン¹²の地へ入ろうという召しをいただいて、旅路を続けているのに、いろんな辛いことが出てくると、神さまに祈る前にモーセに¹³眩くんです。「あんたがこんな所へ引きずり出したのは、我々をここで餓死させるためだろう」とか、いろんなことを言うわけです。そのたびにモーセは祈つて、執り成している。ここでもそうです。

「モーセは民のために主に祈つた。⁸主はモーセに言われた。「あなたは炎の蛇を造り、旗竿の先に掲げよ。……⁹モーセは青銅で一つの蛇を造り、旗竿の先に掲げた。蛇が人を含んでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た。」

癒されていったという。これをキリストは引いてこられた。この3章のニコデモとの対話のあとで、突然これを引いてこられた。

「¹³天から降つて来た者、すなわち人の子のほかには、天に上つた者はだれもない。¹⁴そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。」

と。呪い¹⁵なんです、蛇というのは。「人の子もまたあの蛇の姿で上げられねばならない」ということは、「十字架は呪いである」ということです。神さまの呪いを一身に背負っておら



れるということです。「木に掛けられる者は呪われる」と、ガラテヤ書に引かれています。だから、正にキリストは呪われるべき蛇の姿となって十字架に掛けられて、そして呪われることを通して人々を救われたという、大変なことですよ。

¹⁵それは、信じる者が皆、人の子によつて永遠の命を得るためである。」

と。だからニコデモとの「人、新たに生まれずば」とか、「水と霊によつて生まれずば」とか、そんな霊の誕生ということをずっと仰つていながら、突然、蛇が出てきて、「私も上げられる」という。そして次に、16節の有名なところ、

「¹⁶神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

ここへ通じていくんです。「いったい霊の誕生はどこへ行つたの？」と、論理的に言えばそうでしょ。あれだけ、

「新しく生まれよ。肉から生まれる者は肉であり、霊から生まれる者は霊である。

風は思いのままに吹く。誰も風は見たことがない。音は聞こえるけれども見えないではないか」

と、そんなふうに非常に天界の消息を、霊の世界のことを仰つていながら、突如として蛇が出てきて、「神はその独り子を賜つたように……」と。ということは、この蛇の姿となつて呪われて十字架にご自身をお捨てになつた。そこに我々の一切を背負いきつて、そして贖いを完^{まつ}うされた。そして、ご復活されて、ご自身の分霊である聖霊を我々にくださる。これが「新しく生まれる」ということなんです。

聖霊による新生、その前に十字架がある。「十字架・聖霊」、これが「人、新たに生まれる」ということで、これは人間が人間を生み出すことは絶対にできない。なんぼもう一回お母さんのお腹に入つたつてだめです。これは神さまだけができる御業です。我々を産むのはお母さんのお仕事でした。けれども、霊なる新生、これをやつてくださるのはイエス・キリストだけ。それも神さまの御意^{みこころ}を体して、イエスは人の姿をとり、そして御意を成就し、我々に新しい生命を与えてくださる。こんな凄いことがあるでしょうか。

だから、正に救いということは神の御業^{みわざ}なんです。我々から出たことではない。我々は、願ひがあります。「このままでは死んでしまう。このままでは命がない。飲ひもない。何とかしてください！」という呻きがあります、渇きがあります。でも、その渇きを満たしてくださいるのは、このイエス・キリストという、この天から来たお方だけ。そのことをニコデモはちつともわかつていない。我々もわかつていなかった。そうでしょ。みんな同じですよ。それはニコデモさんはえらいよ、こつそりと夜でもやつて来て、「先生、教えて！」と来ただけですよ。

「それは人から出ない。神さまの御業だ。無条件の御業だよ」

と。サンダー・シングのように切に求めた人にサツと与えられる。渇きのないところに神



さまは下さらない。値打ちがわからないから。

「救いというのはそんな安直あんちよくなものではない。命懸けのものだよ」

と。イエスは命を懸けてくださった。十字架で。それを無償でくださる。

「お前のマイナスは全部引き受けたから。私は蛇となつて呪われて上に高く掲げられた。蛇を仰ぎ見た者はみんな癒された。私を受け入れる者、私を信ずる者、これはもう滅びない。私は生命となつてお前の中に宿るのだから」

と。まあこんな凄いことをなさつてくださるお方が他に、天上天下どこにあるでしょうか。哲学的宗教論はあちらこちらにいろいろあるでしょう。でも、具体的に事実をもつて我々に生命を与え、死んでも死なない生命、そして新しい誕生を与えて、永遠につながるような生き方をさせてくださる。これはイエスさまだけです。

この点でヒルティとサンダー・シングは共通性があります。ヒルティは天上の生命、永遠の生命を大事にしました。ヒルティの最後の著作は『永遠の生命』でした。正にヨハネ伝は永遠の生命そのものを与えようとしている。それを具体的に味わたったのがサンダー・シングです。しかも、すぐこないだの人です。小池先生よりちょっと先に生まれて、15歳ほど早く生まれた方です。そして日本にもやって来た。インドの方です。インドの宗教の中で生まれて、そして後継者として嘱望しよくぼうされていたのに、キリストに出会って、すっかり変わってしまった。迫害の中でキリストを伝え続けた。非常に霊的に深い方です。我々に非常に共感を呼びます。だから、そういう角度からこの16節から読んでいきます。

「¹⁶神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。¹⁷神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によつて世が救われるためである。

¹⁸御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。¹⁹光が世に來たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになつている。」

永遠の生命の君としてキリストが来てくださった。そして御業を成してくださった。

「私は復活よみがえりであり生命いのちである。誰でも私を信じ受けとる者、私と一つとなる者は永遠の生命である。私を退ける者はもう生命はないではないか」

と。自分から創り出せないんですから。キリスト以外のどこを探しても永遠の生命なんて転がっていませんよ。それを「ノー!」と言つて拒絶したら、これは自分で自分を滅びに定めているではありませんかと、自由意志によつて。サンダー・シングは盛んに言うんです、

「神さまは決して強制なさらない。神さまは人間の自由意志を非常に大事にしておられる。心から願ひ求めなければだめなんだ」

と。心から願ひ求めれば、即座に与えられる。まあ、ある程度の準備を経た上ででしょうけれども。祈りが聞かれたということがわかるために準備を求めておられる。何も対価な



しに。「お前はこれだけの修行を積んだから、これだけの苦勞したから、お前に生命をやる」ということではない。神さまがくださる生命の尊さがわかるための準備はいろいろさせたまいます。けれども、何かとの引き換えではない。それは無償で、価なくして。そのことがこのヨハネの3章16節からの、

「¹⁶神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。¹⁷神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。¹⁸御子を信じる者は裁かれない。

救われている、もう生命の中にある。「信じる」というのは、もうここではつきりますね。キリストさまと一つになる。心の中にキリストさまに住んでいただく。神の宮であるこの心をキリストに開いて入っていただく。入っていただいたら、一つではありませんか。そうでしょ。入っていただいたのに、まだどこか向こうにいますということはありえないですね。入り、そして抱き^{いだ}という、それが「信じる」ということ。その者はもう生命の中にあります。それをしない者はもう審^{さば}かれてしまっている。

信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。

¹⁹光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。

それが、もう裁きになっている。

なぜか。自分の悪い行いが照らされるのが恐いから。

²⁰悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。²¹しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」(ヨハネ

3・16～21)

キリストに宿っていただいた人間はもはや自分を主張しません。一切は神さま、キリストさまの御業です。己が誇りとか、そういうものはない。自分の中から何も善いものは出てこないということを知り尽くしましたから、自分の中に生命がないということもいやというほど知っています。だから、このお方を大事に大事にしたいという、その願いだけに生きている。しかも、世俗の中を立派に生きている。世俗生活は大事だよということを言う。世俗生活を通して神さまはいろいろ鍛えてくださると、ヒルティも言いました。

「どんな苦勞も、苦難も全部、神さまが善かれと思って備えてくださっているのだから、決して運命を嘆かないように」

ということをサンダー・シングは言います。あらゆることがプラスになる。そのままを受けなさいと。「いや、不信仰のためにこんなことが起こったのではないか」とか、そんなことは何も考えることはない。一端、主さまに入っていたいて、それからずうっと関係が続いていますと——これは追っ払ったらだめですよ。キリストを追っ払ったら、今度は変



な霊がきますから、そうするとこれはもうどうしようもない。けれども——いつもイエスさまに住んでいただいているなら、その中で起こることはすべてプラスです。もう何も自分でとやかく判断する必要はない。

「²²その後、イエスは弟子たちとユダヤ地方に行つて、そこに一緒に滞在し、洗礼を授けておられた。²³他方、ヨハネは、サリムの近くのアイノンで洗礼を授けていた。そこは水が豊かであつたからである。人々は来て、洗礼を受けていた。²⁴ヨハネはまだ投獄されていなかったのである。²⁵ところがヨハネの弟子たちと、あるユダヤ人との間で、清めのことで論争が起こつた。²⁶彼らはヨハネのもとに来て言った。「ラビ、ヨルダン川の向こう側であなたと一緒にいた人、あなたが証しされたあの人が、洗礼を授けています。みんながあの人の方へ行つています。」²⁷ヨハネは答えて言った。「天から与えられなければ、人は何も受けることができない。²⁸わたしは、『自分はメシアではない』と言ひ、『自分はあの方の前に遣わされた者だ』と言つたが、そのことについては、あなたたち自身が証ししてくれる。²⁹花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立つて耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている。³⁰あの方は栄え、わたしは衰えねばならない。」

洗礼のヨハネという方は非常に謙虚な方ですね。イエスを紹介して、「この方こそあなた方を火と聖霊でバプテスマなさる方。私はその方の靴の紐を解く値打ちもない」と言つた。しかし、ヨハネの信奉者がたくさんいるわけです。そこへイエスが現れた。「どっちが本ものですか」なんて言い出した。その時にヨハネは、

「あの人が本ものだ。あの人は栄え、私は衰える。これは私が天から授かつた定めだ。人は天から受けなければ、何ものをも創りだすことはできない」

と、そういうことを言つた。

「天から与えられなければ、人は何も受けることができない」

と。ちゃんとヨハネは自分の分をわきまえております。そして、「あの方が栄えてください。それが私の歓びだ」と。だから、ヨハネが投獄されて打ち首になった時に、イエスは非常に悲しまれたと思います。

³¹「上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地に属する者として語る。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。³²この方は、見たこと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない。」

肉なる者は受け入れない。

³³その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確認したことになる。



34 神がお遣わしになった方は、神の言葉を話される。神が「霊」〔聖霊〕を限りなくお与えになるからである。35 御父は御子を愛して、その手にすべてをゆだねられた。36 御子を信じる人は永遠の命を得ているが、御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒り〔審判〕がその上にとどまる。」(ヨハネ3・22～36)

ここにはつきりと、天なるものと地なるもの、そのコントラストが出ています。

「神がお遣わしになった方は、神の言葉を話される。神が『霊』を限りなくお与えになるからである」

と。これはイエスさまのことを指していますけれども、私たちも同じなんです。私たちもイエスさまの弟子になる。弟子になるということは、イエスさまのお受けになっている聖霊を私たちも受ける。私たちに宿ってくださる聖霊はキリストの霊です。イエスがお受けになったのは神さまの霊を直接にお受けになった。我々はイエス・キリストを通してやってくる霊だから、「父・御子・御霊」が一体となって我々の中に宿ってくださる。この聖霊をいただくと、我々は神の言葉を語らされる。もはや自分の知恵の言葉ではなくて、神の言葉を語らされる。サンダー・シングもそのイエスさまとの対話を通して得たことを、示されたことを彼は一生懸命に語ってくれている。だから、我々の心に響くわけです。

皆さん、「イエスさまは特別だ。パウロさんは特別だ。サンダー・シングは特別だ」と――確かに特別ではあります――けれども、私たちも特別で、小さいながらも同質になれるんですよ。同質にさせていただく。そうでないと、イエスさまは嘆かれますよ。「自分なんか」なんて言うてはいけない。「自分」がないんですから。「自分」というものはもう十字架で消えてしまっているんですから。

「お前なんかもういない、消えているよ。十字架で消えている。聖霊の私がお前の中で輝いている。安心して語りなさい。語るべき言葉を与えてあげるから」

と。だいたい、あの使徒たちがそうでしょ、漁師たちでしょ。ペテロもヨハネもヤコブもみんな漁師をやっていた。みな学問的知識のない方なんです。そういう者をあえて選んで、そして訓練して、あのペンテコステのあとの使徒行伝のペテロとかヤコブ、ヨハネなんてはみな人が変わったように凄いことをやっています。それはみなキリストが働いておられるからであって、もはや自分に根拠はない。そういうことですから、我々も安心して、イエスさまに従っていける。

●「第一章神との交わり」(第五の書)

サンダー・シングの所をまたちよつとご紹介します。1925年に書いている「第五の書 神への渴き」というのがありまして、その中に「第一章神との交わり」ということを書いていますので、そこをまずご紹介します。「霊の眼が開かれる。霊の耳が開かれる。その



この大切さ」ということを書いてくれている。

《一、キリストが、三人の弟子たちを選び山上に伴ったのは、休息のためだけではなく、キリストの神性から輝き出る栄光の真実を、弟子たちに少しでも垣間みせるためだった。キリストとの日々の歩みは、この啓示を得るための準備だったのである。弟子たちはキリストの奇蹟をみ、かつて誰も語れなかった奇しき御言葉の数々をその耳で聞いてきたが、さらにただ驚き敬う以上のことが、彼らには必要だった。群衆にもまれる日々を後にし、山上の人一人いない静まりの中で、キリストの神的人格から発露する超越的栄光にひたることでどうしても必要だったのである。

日頃は、キリストの所にみんなワッショイ、ワッショイ押しかけて来ますね。病を癒してほしい、何々してほしいと、もう食する暇もないほどに——さっきの讚美歌121番のとおりです——そういう所で弟子どもも、もみくちゃにされているわけです。だから、そこからこの世をしばし離れて山に登ろうと、三人だけを連れて山に登られた。その時にキリストは眩い姿に^{まばゆ}変貌されますね。モーセとエリヤが現れてきました。そして、どのようにして天上にお戻りになるか、まず十字架のことを語られていたという場面が出てきます。

ふたたびいえば、キリストの地上的体が変貌するだけでは足りず、弟子の目も開かれる必要があった。霊眼が開かれなければ、彼らはキリストの御顔を仰ぐこともできず、モーセとエリヤと一緒にいることも見分けられなかったからである。また、耳を開けている必要があった。耳が開いていなければ、「主が遂げられようとしている最後」についての話をきくこともなければ、「彼のいうことをきけ」という、神ご自身の御声をきくこともなかったからである。

神はキリストを通して人ととなられ、キリストを通してお語りになる。そこで、わたしたちは、いちいち理由をたずねることなく、キリストに全託して従うべきである。自分の耳をこの世の雑音に開いているうちは、主の甘美なる御声をきくことは決してできないし、全身全霊から願ひ求めるまでは、主と出合い交わることもできない。静かにしていなければ人の話をきくことはできないし、注意を集中していなければ、その内容も十分には把握できない。そのように、天の父の御声をきくためには、心と精神のすべてを傾注して主の御前で静かに待つ必要がある。主は熱心に彼を探し求める人たちには、今も姿を現されるからである。そればかりか、このようにして求める人々は、キリストとのつながりを通して、モーセとエリヤとの交わりを飲んだ三人の弟子たちと同じく、聖徒との交わりをもつ特権を手にするのだらう。……

三、瞑想の中で、神はわたしたちの心に語りかけるが、言葉によって語るのではない。あらゆる生命の湧き出る泉である神に向けて謙虚に心開くときに、神は満ち溢れるほどの臨在を心に注ぎ込んでくださる。泉の下に置かれた器に泉の水が溢れ注ぐように、神の聖霊と真の平和は、へりくだって受けとめようとする人の心に、溢れるばかりに



降り注ぐ。…… そのように、わたしたちが静かな祈りの山に登りそこで主と出会った後には、幕屋を建てようと思ひ巡らした弟子たちのように時間を浪費せず、新たに得た力をもって人間世界に立ち戻り、与えられた仕事を完成させるのである。》
これが大事なところですね、そういうことを言ってくれています。

●「第五章 キリスト教」（第七の書）

それから、さっきの「モーセが荒野で蛇を上げたように」という所で、1924年に書きました「第七の書 実在の探求」という箇所をちよつとご紹介したいと思います。これはサンダー・シングの結論部分に相当するんですけれども、いろんな宗教、ヒンズー教とかイスラム教とかを紹介してきたあとに、「第五章 キリスト教」という章をつくりまして、そこにこんなことを書いています。キリスト教とは何かと。

《キリスト教とは、「われは道なり、真理なり、生命なり」といわれたキリスト自身のことである。

キリスト教とはキリストご自身のことであると言う。

このようなことは、他のどんな既成宗教にもみられない。他の宗教は儀式や教義に基づいているが、キリスト教は永遠にわれわれと共にいる生けるキリストご自身に基づいている。キリストが弟子たちに自分で書いたものをいっさい残さなかったのは、主が常に彼らとともに、彼らの内にいて、彼らを通して働き続けるからである。「わたしは世の終わりまであなた方とともにいる」と堂々といえた預言者は一人もいない。それは、神のみがなしうるからだである。

われわれは、主が今に至るも彼の民とともにおられること、彼らを通して働き続け、今現在も働かれ、これからも働かれることを知っている。それは、「神がすべてのすべて」となるためである。》

と。素晴らしいでしょ、「キリスト教とはキリストご自身のことである」と。全くそのとおりです。それから、十字架のことを次のように言ってます。

《キリストの受難と十字架

一、イエスは、たった六時間だけではなく、

「六時間」というのは、午前九時に十字架にかけられて午後三時に「わが霊を御手にゆだねます」と言われた。六時間ですね。

全生涯が十字架であつた。きれいだ好きな人間が不潔を嫌い、善良な人間が束の間も悪事に耐えられないとすれば、無原罪の聖なる存在が罪人の中で過ごす三十三年間の苦しみがどれほど大きかったことか。罪にまみれた人間には、このような苦しみを少しでも理解することは不可能である。あの十字架に秘められた奥義を理解できるとすれば、キリストの計り知れない愛、彼がいかに愛の化肉であつたか、いかにわれわれの



救いのために天の栄光をかなぐり捨ててまで罪深き世に降りたもったが、容易にわかるはずである。

二、キリストの受難は、特に、人間の救済のための神の受難であった。あらゆる生命のただ一つの源がある。生命あるものはみな、そのお方から生命を受けている。そのような関係とつながりによって、われわれはそのお方の中で生きている。だが、被造物との間にもっているこのような生きた関係を通して、神は生命ある者たちが苦しむときに苦しみを感ぜないであろうか。

我々が苦しむ時、神さまも苦しんでおられるというんです。

痛みを感じをお造りになった神もまた、痛みを感じをもたないであろうか。そうであれば、神がキリストにおいて苦しまなかったことがどうして有り得よう。

キリストが来られたのは、永遠の昔から隠されていた真の限りなき父の愛を特に明らかにするため、自分の生命を投げ与えることによって罪人の靈魂を救うためであった。また、死んで復活することにより、その死が世にいう死ではなく生命の泉であること、罪によって神から離れることが死であることを証明するためだったのである。

三、キリストが磔刑に処せられたときに、二つの世界が示された。あらゆる地方や属領から過越しの祭りに加わるために人々が押し寄せたように、あたかも全被造物が共に集い贖罪を目撃するかのように、天使たちとともに霊的世界の住人たちもまたそこにいた。

こんなことを言っているんです。その当時の人々がどつとやって来たでしょ、過越の祭りの時ですけれども。それだけではない。霊界のいろんな者たちも全部、そこに居合わせていた。そしてそれをジッと見ていたと、そういうことを言っています。

キリストはその生命を身代^{みのしろ}としてお与えになったがため、罪を許し罪人を救う地上での全権が与えられた。また、人となったときに置いてきた天地にわたる全権をも回復された。》

天上の聖座を捨てて人の姿をとって来られた。栄光を天に残しておかれた。それを再び回復されたという。

●サマリアの女との会話

この3章の素晴らしい所を今、ずうつとご紹介してきました。これで今日の前半の主題の3章は、これくらいで充分なんですから。後半の4章はまた楽しい、「サマリアの女との会話」ですから、今度は田園交響楽みたいな所です。

「さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、

2——洗礼を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子たちである——



³ ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。⁴ しかし、サマリアを通らねばならなかった。⁵ それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。⁶ そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。

私だったら、「ヘタレこんでおられた」と訳したいところです(笑)。やはり暑い旅路を来られたイエスも井戸の所に来て、「ああ、しんど!」と。そうしたら、サマリアの女が水を汲みやって来た。真昼の中に。サマリアの女からしたら、この休んでいる人がユダヤ人だということがすぐわかるわけです。ところが、イエスはどういうわけか、このサマリアの女に声をかけられた。絶対、お互いは口をきかないという間柄なのに、イエスの方から声をかけられた。きつとこの女の人はびっくりしたんですね、「もの好きな人だな、このひとは。この方は何で私に声をかけてくれるのだろうか」なんて。

⁷ サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。⁸ 弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。⁹ すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。

サマリアの女は、「どうして、水を飲ませてくださいと、そんな気安く仰つてくださるんですか?」と。「気安く」というのは心安くというかな、普通は乗り越えられない断絶がある。それを飛び越えて、気安く「水がほしい」と、普通の人間のように語りかけてくれた。「私はうれしいんですよ」という気持ちを私はここにくみ取りたい。イエスという方も、人をそんな民族や人種で問題にしておられませんから、そこにサマリアの女が水を汲みにやってきたから、「ああ、ちょうどいい機会だ。私は喉が乾いているから、水がほしい」と、そのまま仰つたのかもしれない。ところが、ここに不思議な関係ができあがりました。「どうして、私に声をかけてくれたの。どうして水がほしいと言ってくれたの?」と。そこで、ここでイエスが本もののイエスに変貌なされたわけです。

「うむ、そうだよな。でもな、私が何者か知っているかい。私が何者かわかったら、あんたの方から、水をほしいときつと言うにちがいないよ」

「なんで?」

「いや、この水を飲んだってまた渇くではないか。でも、私の中から出てくる水を飲む者は永遠に渇かない。永遠の生命に至る水が湧き出てやまないんだ」

「へえ〜! 水くみに来なくていいの!? それはありがたいことや。それをちょうだい。だけど、あなたは何も汲む物を持つてないではないの?」

と。こういう問答ですね。これをここで劇をやりたいですよ、あなたがサマリアの女にな



つて、僕がイエスになってね（笑）。そういう場面です。

¹⁰ イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。』
¹¹ 女は言った。「主よ、あなたはいくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。」

ここからは、このサマリアの女のプライドがのぞくんですよ。

¹² あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。』¹³ イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。
¹⁴ しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。』¹⁵ 女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」

¹⁶ イエスが、「行つて、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、
¹⁷ 女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。¹⁸ あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。』
¹⁹ 女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。』²⁰ わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。』²¹ イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。』²² あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。』²³ しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。
²⁴ 神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならぬ。』（ヨハネ4・1～24）

まあ突然、また深いことを仰つたですね。さつきは、「永遠の生命の水」の話でした。今度は礼拝の話に移りました。場所ではない。エルサレムという場所でもない。ゲリジムの山でもない。場所ではないんだよと。さつきから、「心が神の宮だ」と言いました。霊と真理をもって、そのあなたの居るその場所を聖なる場所にしてそこで礼拝する。こういう礼拝者を神さまは求めておられる。これは革命的宣言です。なぜならば、ユダヤ人にとってあのモーセの十誡——出エジプト記、レビ記、民数記——あそこに記されている儀式は大



変な面倒なものでしょ。「祭壇はこのように造りなさい。お祭りはこのようにしなさい。衣服はこのような服をつけて、このような儀式をやつて、動物の血を携えて」と微にいり細にいり、こと細かに記されている。それを全部、否定して、

「霊と真理をもつて、その在る所どこでも、いずこにおいても直接祈れる。そういう時が来ているんだ。そういうものを神さまの側から求めてもらえる」

と。これはもう凄いことです。我々はそういう凄いところに入れていただいているんです。イスラエルでもどこでもない。キリスト教国でもない。今、あなた方のいる東洋の一角、日本で、その在る場所がいい。心が神の宮であると。

「心を神の宮として、そこで霊と真理をもつて祈る。あるがままの姿でいい。偽りなき心で、^{おきな}幼児の心で、神さまに祈る。そういうことを求めてもらえるんだよ」

と。これに徹していったら、いろんな宗教的な対立は消えるはずなんです。

「聖餐式は、洗礼はこうしなければならぬ。様々な儀式や順序があるんだ」

とか、いろんなことを人間は決めて、教義にして、それぞれの教派の特徴にしている。特徴がなくなれば、存在理由がなくなるといつて。ところが、キリストは存在理由をなくそうとしておられる。神さまと直結する。サンダー・シングも、

「キリスト教とは、キリストご自身がキリスト教である」

という。そのキリストご自身がこのようにして、

「霊と真理をもつて礼拝する。直結の世界だ。直ちにそこに入るんだよ」

と。有り難い話ですね。しかも、それは「新しく生まれなければ入れない」と言う。では、どうしたら新しく生まれるのか。

「私が道だ。私が道を開いたではないか。あの十字架で、あの呪いとなつて、道を開いたではないか。私は直ちにくる。祈る者の心に直ちに入ってくる。心を開けさえすればいい」

と。よく小池先生は、

「イエス・キリストの中に躍り込め、ジャンプしろ」

と仰った。私はあれは苦手なんです。私は心を開く。心を開けば、スッと来てくださる。これが私流なんです。だから、皆さんそれぞれです。元気のいい人は飛び込んでください。勇ましい人は飛び込んでください（笑）。私みたいに勇ましくない人間は、心を開く。心を開けば、雨は上から降ってくる。太陽の光も上から射し込んでくる。すべて開けば入ってくる。十字架が開いてくださった。そこに聖霊が降ってきて宿ってください。「もう、お前を離さない」と。ありがたいです、寝たままでもいい。横になったままでもいい。心がキリストを求めていればいいんです。こんな有り難いことはありませんでしょ。

こんなことをイエスが真剣に仰るものですから、この女の人は本当にびっくりした。

²⁵女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知つ



ています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」²⁶イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

²⁷ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。²⁸女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。²⁹「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」³⁰人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。

³¹その間に、弟子たちが「ラビ、食事をどうぞ」と勧めると、³²イエスは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。

突然、また天上のことをお話になるわけです。

³³弟子たちは、「だれかが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。

³⁴イエスは言われた。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。」

「^{みこころ}御意を成就する。これが私の食べ物だ」と。御意を成就していれば、私は何かおながいっぱいになつてしまうと。そんな感じですね。イエスは水を飲んでおられない。サマリヤの女と話をしながら、女は水瓶を置いて跳んで行つてしまった。水も飲んでいない。おなかもペコペコ。けれども、「私の食べ物御意を成就することだ」と。それはそうですよ、四十日四十夜断食されたでしょ。それを体験しておられるお方ですもの、そんなちよつとやつとでくだばるようなお方ではないですよ。

私たちも、「あなた方の本当の食べ物は何ですか?」と。御馳走もいいですよ。でも、御馳走は体力を養い、御意を成就するためにいただくのであつて、ただ「グルメ、グルメ」といつて、グルメの旅をするためにやるのではないよと。本当に御意を行うこと。サンダー・シングは言いました。三人の弟子は山上の変貌をみて、驚いて喜んだ。「さあ、小屋を建てましょう」なんて言つたけれども、そんな小屋なんか建てなくていい。直ちにくだつて世の人たちの中で働くんだと。神の御業を行うためにこそ、素晴らしいものを見せられ、眼を開いていただき、耳を開いていただいたのではないか。それを活用しなさいと。

だから、イエスは正に、肉体的にはどんな限界状態にあるうとも、直ちにそれを乗り越えてしまつて、霊的な変貌を遂げておられるんですね。霊的変貌を遂げておられる。そうすると、御意を成就すること。救いを要する人がたくさんいるではないかと。見えるではないかと。弟子たちには見えません。イエスには見えているわけです。救いを必要としている人がいっぱいいる。しかも、もう時は満ちている。「時は満ちた。悔い改めて神の国を信じなさい」と言われた。それが見えているわけです。だから、「さあやろう、さあ働こう」



と弟子たちに仰っている。

³⁵あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月もある』と言っているではないか。わたしは言っておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている。既に、³⁶刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている。こうして、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶのである。

これはイエスの救いがくるまでに、預言者がいろいろな苦勞をして備えてくれたわけです。アブラハムに始まって永い永い準備期間があったということでしょう。

……³⁹さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。⁴⁰そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるようにと頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。⁴¹そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。⁴²彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であるとわかったからです。」

いいですね。サマリアの人たちは全部、自分で確認して、「あなたは媒介をしてくれた。もうお役ごめんだ。私たちは直に^{じか}ご本尊から話を聞いて納得したよ」と言った。またイエスもこの人たちの要望に応えて二日間臨時停車されたわけです、旅の途中で。

イエスという方が二日間泊まってくださったら——そして他にすることがないから——イエスは絶えず語っておられるわけでしょ。もう畑は色づいている。サマリアであろうと何であろうが、そんなことは関係なしです。人のハートに語り給う。かえってパリサイ人は頑^{かた}なです、先入観をもってブロックしてます。それに対して、サマリアの人たちは非常にオープンです、オープンマインドです。そういう人たちをイエスは好きなんです。スーッと入っていける。彼らもスーッと受け入れた。それでももう本当にそこでひとつの霊の場ができあがってしまった。福音の場ができあがった。こんな感じがいたします。それからあとサマリアの人たちがどうなったか、それは出てきませんけれども。こういうサマリアの女との対話を通して、サマリアの人たちの中に大きな変化が起こった。それは素晴らしいなと思って、私はここが大好きです。3章の方は非常に深遠な場面でした。ここは非常にドラマチックな昼の場面です。静と動、そういう感じで、ここが大好きなんです。

●役人の息子をいやす

「⁴³二日後、イエスはそこを出発して、ガリラヤへ行かれた。⁴⁴イエスは自ら、「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」とはつきり言われたことがある。⁴⁵ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した。彼らも祭りに行ったので、そのときエルサレムでイエスがなさったことをすべて、



見ていたからである。

⁴⁶ イエスは、再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、前にイエスが水をぶどう酒に変えられた所である。さて、カファルナウムに王の役人がいて、その息子が病気であった。⁴⁷ この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞き、イエスののもとに行き、カファルナウムまで下って来て息子をいやしてくださいるように頼んだ。息子が死にかかっていたからである。⁴⁸ イエスは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言われた。⁴⁹ 役人は、「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」と言った。⁵⁰ イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。

いいですね、この人は。

「来てください。お願いします！」

「帰りなさい。あなたの息子は生きる」

と。それだけしか仰らない。「なに？ 来てくれないの。ケチンボウ！なんて言っていない(笑)。
「帰りなさい。あなたの息子は生きる」「はい、ありがとうございます」と。それで帰っていった。これは凄いいと思いますか？ そしたら、向こうから使いがやってきた。「だんなさん、息子さんは助かりましたよ！」と、輝いて報告した。

⁵¹ ところが、下って行く途中、僕たちが迎えに来て、その子が生きていることを告げた。⁵² そこで、息子の病気が良くなった時刻を尋ねると、僕たちは、「きのうの午後一時に熱が下がりました」と言った。⁵³ それは、イエスが「あなたの息子は生きる」と言われたのと同じ時刻であることを、この父親は知った。そして、彼もその家族もこぞって信じた。⁵⁴ これは、イエスがユダヤからガラリヤに来てなされた、二回目のしるしである。」

「王の役人」は——文語訳では「王の近臣」と訳しています——必死な思いでイエスにすがった。そうしますと、「帰りなさい。あなたの息子は生きる」と。この一言を信じて、彼は帰っていった。そうしたら、そのとおりになっていた。凄いでしょ。

この点につきましてサンダー・シングは、
「神さまのお言葉を信じて、そして、そのまま行動に移していく。はいつと言つて従っていく。これが大事だ」

ということを強調している箇所がありました。だから、私たちはただ聞いて、「ああそうですか、わかりました」で終わりではない。

「帰りなさい、あなたの息子は生きる」

と言われたら、そのお言葉をキャッチして、そのとおりに信じてそのまま行くわけです。
「いや、治ったら信じますよ」



ではない。人間はみな、

「治つたら信じますよ。結果をみるまでは安心できません」

と、これが肉なんです。けれども、神さまの世界は違う。御言によつて直ちにそこで起こっている。それを信じて行動に移していけば、そのとおりのことがそこに成就していく。こういう非常に躍動的な世界なんです。

ある手紙にこんなことが書いてあった。

「私はこの頃、メールということをやりました。論文とか必要なものをメールで先方へ送るということを、息子を通してやりました。驚きました」

と書いてある。皆さんは、何を今頃驚いているのかと思われるかもしれないけれども。文書や論文をメールに添付して送る。ボタンをポンと押したら、ビューンと向こうへ飛んでいく。アメリカでもドイツでもどこへでも飛んでいくんですね、一瞬にして。それで私は何を思ったか。この話ですよ。「帰りなさい、あなたの息子は生きる」と、一言葉言われたら、その瞬間にメールは飛んでいつているんです。キリストの祈り、キリストの御力、それがそこへ飛んでいつて、それで変化が起こっている。凄いではありませんか。

神さまの世界はそうなんです。だから、ITとかそういうものが発達したということは、我々の霊の、神さまの次元なんて決して作り話ではない。神さまには神さまの世界があり、その法則がある、霊の法則がある。それは時間とか距離を超越している。肉体のイエスさまは飛んでいけません。でも、イエスさまの霊、聖霊、神の御力は、時間や距離を全部乗り越えていく。それをこうやって現わしてくださっている。

今は、イエスさまは聖霊という姿で、神さまの所からいついかなる時でも、ボタン一つでサッと来てくださる。いやもう絶えず居てくださるんですよ。我々の心を宮として住んでくださり、そして我々を包んでくださり、そして我々に祈ることを、御霊の主さまが我々の中で我々の祈り、呻きを聞いて、天に発信してくださって、直ちに聞かれてそれが成つていくという。それはいつ現実に現れるか。これは瞬間的に現れることもあるし、ある程度の時間をおいて現れることもあるし、向こうへ行つてからのこともある。それは神さまの御意しだいです。

けれども、イエスが「うん」と言われたら、もうそれは全部成っているんです。根源現実で成っている。十字架で一切が成ったんです。過去・現在・未来、全人類の罪を全部救われた、贖われた。皆さんが、「では、イエスが生まれる前の先祖はどうなったんですか？」と聞かれると、イエスは、

「私は世の創られる前から在った。時がきて、人の子の姿をとった。けれども、それは全人類の創られる前から私は居て、その者たちを愛してきた。その者たちに生命を与えてきた。それをあの時に、ただ一回きり、永遠の贖いを完うした。これで全部——過去・現在・未来——全部、完全に贖いきった」



と、仰います。

●「復活の奥義」(第五章キリスト教)

復活のことをサンダー・シングは次のように書いていますので、それをご紹介して終わりますよう。

《復活の奥義》

一、キリストは磔刑^{たつけい}に処せられたときと同じ体で甦^{よみがえ}った。ただ罪だけが体を損ない天に入ることをできなくさせる。だが、キリストの体は一点の染みなく、死を克服したのちに栄光の体に変えられた。その栄光の体において、主は神とともに御座につかれる。十字架上で受けた傷も栄化され、その栄光の体に刻まれたままである。

まだ傷跡は残っている。それは輝く姿で残っているという。

それは、救われた者たちがその傷をみるときに、主の限りなき愛を常に思い起こし、彼らを救い永遠の栄光に与る権利を与えるために、どれほど主が十字架上で苦しめられたかを示すためである。

二、神は霊である。神は霊以外にも無生物を創造された。だが、霊たる神が完全なる力によって霊ならぬ物質を創造されるのであれば、その同じ力によってキリストの肉体を甦らせ、栄光の体に変えられないはずはない。神は確かにそれがおできになった。事実そうされたのである。

われわれはまた、目を醒ますために眠るように、ふたたび起き上がるために死ぬ。夜がくれば疲労の中で眠りにつくが、朝になればまた新鮮な活力を回復して起き上がる。このように、われわれは弱さによって死ぬとも、生命と栄光の中でまた起き上がり、死も罪もないあの生命に入る。……

神の似姿に造られながらも、罪のために初めの状態から墮落してしまった者たちを、死と復活を通してふたたび神に似た栄光の体に戻し、神の交わりと不滅の天界に迎える。これが、神の化肉された目的である。

キリスト教の有効性

一、キリスト教が有用である証拠の一つは、どの時代のどの国、どんな種類の境遇の人々にとっても、それが心に平安をもたらし、魂の飢えと渴きを満たしてきたということだ。平和を発見できなかったのは、「見ても見ず、聞いても聞かぬ」者たち、換言すれば、天地の美の真只中にありながらその色がみえず、耳が付いていても、魂に響く音楽を味わう耳をもっていない人々だけである。

二、人が野望を達して富みと贅沢を手に入れても、なお心は満たされず平和にもなれないことは、経験が証明するところである。神の中に平和を見、神の聖心に従う人はこれとは異なる。世と世が与えうる喜びがすべて奪われようと、たとえ受難と迫害



を耐えなければならぬとしても、「世が決して与えることも奪つこともできない」あの真^{まこと}の歎びと平和が、彼の心の中にはある。

彼は、来世で報いを得たくてこのような歎びをもつのではない。世の知らない「隠されたマナ」から糧と力を得、その力によって十字架を負い、受難を耐え忍ぶことができるのだ。キリストを信じる人々に力を与えるのは、この神との交わりという霊の糧である。報いへの望みだけでは受難に耐えるに十分な力は決して得られない。一時耐えられることはあっても、一生にわたり耐えることはできないのである。

真のキリスト教徒がどこからみても静寂に溢れ、ついには勝利するという事実はその人生に聖霊と神の現存が満ち満ちている結果であり、それが真のものである確たる証拠である。》

と。そんなことを言ってます。

ちやうど時間になりましたのでこれで終わりますけれども、この3章と4章は、皆さん、楽しかったでしょ。私はサンダー・シングには本当に心から感謝したいと思っています。

● 祈り

それでは一言、お祈りして終わりたいします。

主イエス・キリストさま、今日もこうしてそれぞれの所からあなたが御手によって呼び集め、この所で御名を讃え、主さまを讃美することができました幸いを感謝いたします。

本当にあなたは人らしい人を喜んでくださいます。偽りなく、ありのままをぶちまけて、あなたに体当たりしてぶつかっていく人を、あなたは喜んでお迎えくださり、我々の知り得ない世界を開示し、

「さあ、お前の中に私は宿るからね。永遠にお前と一緒にだ、離れないよ。お前は生命だ、平安だよ」

と言ってくださいます。主さま、ありがとうございます。これはあなただけがお与えくださることのできるもの、あなただけが保証してくださる歎び、平安でございます。どうぞ、この世ではいろんな悩みがあります。しかしながら、どんなことも主に在りては一切、勝利であります。

「一切のこと相働きて益となる」

とあなたが保証してくださっています。どうぞ、己れ一人の救いではなく、本当に苦しんでいる人、悩んでいる人、傷^{いた}んでいる人、その人たちと一緒に背負って、あなたの歎喜の中に入ることができますように。

主イエス・キリストの尊い御名によって感謝してお祈りいたします。アーメン。

